た免疫組織染色を行い，骨折仮骨の観察を行った。硬性仮骨では骨芽細胞周囲に，軟性仮骨では増殖軟骨細胞周囲を中心に局在した。以上よりVI型コラーゲンは，仮骨内の骨・軟骨形成過程の細胞機能の調節に関与する可能性が考えられた。

26. MEPによる術中脊髄モニターを行った外傷性頚椎脱臼の1例

安宅洋美，後藤澄雄，村上正純
山崎正志，大河昭彦，加藤大介
今野　慎，西垣浩光，池田義和
中島文毅　（千大）

症例は23才，男性，柔道の試合中C5-6右片側脱臼を受傷。神経学的にはC7中心性頚髄不全損傷だった。MEPによる脊髄運動機能モニター下に後方より整復，C5-7棘突起間ワイヤリング固定を行った。術中D波は一時消失したが，脱臼整復後より再び出現し始め時間の経過とともに振幅は増大した。術後上肢筋力は左上腕三頭筋の軽度低下を除いて完全に回復した。術中MEPの電位消失は頚椎伸展位による脊髄過牽引を反映していると考えられた。

27. 当科におけるSuspension Laminoplastyの手術成績

岡本　弦，小林健一，中澤　亨
池田　修，鮫田寛明，清水純人
木村健司，坂巻　皓
（鹿児島労災）

Suspension Laminoplastyを施行した70症例（手術時平均56.8才，術後平均観察期間6年6か月）臨床成績およびX線所見につき検討した。JOAスコアは術前平均8.6が最終調査時14.0となり，平林式改善率は64.3%であった。術式について，頚椎可動域の保持およびC5/6の不安定性出現の予防にはヒンジ・サイドへ骨移植を加えない群が，頚椎前彎の保持および頚部痛出現の予防にはC2棘突起へ項筋を復元した群が優れていた。

28. Flexion Myelopathyの術後成績

三井公彦（国立相模原・脳神経外科）

Flexion Myelopathyの定義は，脊椎は正常，にもかかわらず頚椎の前屈運動に伴って圧迫機転が生じるもの。男9例，女2例。年齢は16～30才。徐々に進行する手指・前腕筋の脱力萎縮が9例，歩行障害等の索路性障害が2例。前屈位脊髄造影で脊髄・硬膜管が前方に過剰偏位し扼約される。手術治療は10例に椎体固定術を施行。結果は手指の動きは改善したが握力ほぼ不変2例，良好な握力の改善が得られたもの4例，歩行の改善したもの2例であった。

29. 手関節尺側部痛を主訴としたTFCCmeniscoidの1例

花岡英二，三枝　修，斎藤正仁
西川　悟，藤田耕司，小林照久
（成田赤十字）
六角智之　（千大）

症例は，23才男性。主訴，左手関節尺側部痛。手関節造影により尺側手関節内病変を疑い，手関節鏡を施行した。TFC上，尺背側に付着したmeniscus様の組織が，変性した月状骨三角骨間靭帯部にimpingeされる所見から見られ，病態の原因と考え摘出した。病理組織学的には，線維軟骨成分が主体であった。外傷や変性病変はなく，Palmer分類に相当するものはなかった。我々は，これをmeniscoidと考えた。

30. 特発性指伸筋腱脱臼の1治験例

洪　理江，山口清直，大渕聡巳
（国保小見川総合）

症例は60才男性，職業は花火師である。手の水を払う動作で疼痛が出現し，左中指伸筋腱が尺側に脱臼した為，橈側にて長軸方向に断裂していた腱間結合を縫合した。術後3週間シーネ固定後，可動域訓練を開始し経過は良好である。若干の文献的考察を行い，本症例は加齢変化に伴い脆弱化したintertendinous fasciaおよびsagittal bandに強い負荷が加わり，断裂し，伸筋腱が脱臼したものと考えられた。

31. 舟状骨偽関節による短母指伸筋腱皮下断裂の1例

徳永　誠，竹内　孝，村山憲太
湯山琢夫　（国立習志野）

症例は25才，男性。近医にて左橈尺骨遠位端骨折として4週間のギプス固定を受けた後，母指伸展不能となった。MP関節は伸展制限を呈し，X線検査では舟状骨偽関節を認めた。短母指伸筋腱断裂と診断し手術を施行。同腱は舟状骨結節のすぐ遠位で断裂していた。偽関節部をハーバートスクリューで固定，腱断裂部には腱移植を行った。7年前の交通事故時に見落とされていた舟状骨骨折が偽関節を呈し，腱断裂を惹起したと推察された。